ライトアップされたDSK銀行ビル。

灯も多いので、夜道は明るい。

宿のそばまで来て、裏通りを歩くが、不穏な気配は全くなくて、女性や小学生が普通に通行している。宿から指呼の間にある食料品店で、ミネラルウォーター1.5㍑を0.8Lv(44円)で買った。空港と比べれば三分の一以下だ。

7時に晩酌を開始した。昼間セントラル・ハリで買ったときは、レバーペーストと思い、それ故にパンも買い求めたのだが、開封してみると、クリームチーズだった。

ショーケースに表示札と一緒に置かれているのを見たとき、目分量(100～200㌘)のものが9.99Lv(549円)ならば、多分レバーペーストと思った。しかしレシートを良く見ると、9.99Lvはキロ単価で、1個当たりでは1.63Lv(90円)だ。日本ならばこちらを表示するだろう。要するにそれを買い求めたとき払う金を知りたいか、品質を想定するために単位重量価格を求めるか、文化の違いだと思う。

３．ブルガス(Бургас)

ブルガリア列車事情

11月1日も高曇りで風のない穏やかな朝を迎えた。前日の下調べ結果から、10時45分発でブルガス到着が午後5時50分の列車を利用するつもりだ。

駅までは10分かからないので、早々と朝食を済ませた後は、部屋で読書などに時を費やす。それでもせっかちな性分なので10時10分にはチェックアウトした。

インターネット予約は一泊29€(56.84Lv)だったのになぜか二泊の合計は113.1Lv(6,211円)と安い。僅かな違いにせよ、悪い気分ではなかった。

帰国前日にもソフィアに泊まるので、この宿に決めて一ヶ月後の予約をした。そのときフロントの女の子(オバサン？)は、「予約するときはインターネットなど使わず、直接電話かメールを頂戴。」と云う。予約システムに払う手数料ゆえだろうか。

一連の流れで気安く話ができる雰囲気になり、ふと思いついて中央市場セントラル・ハリからのタクシー料金相場を尋ねる。彼女にしてみれば、通常そのような利用はしないのか、隣にいた同僚にちょっと確かめたりして結論は3Lv(165円)ぐらいだった。昨日嬉々として乗ったのは、率的に云えば7割近くぼられていたことになる。腹も立たないが、ブルガリアのタクシー料金が格安であることを改めて認識した。

ホテル・アリスの外観。下からだと塔のように見える6階の部屋を利用した。

上：機関車と先頭客車。共に汚く洗車など滅多にしないらしい。
下：フォームに立っている人はほとんど喫煙者。

徒歩10分で中央駅、昨日下見した窓口へ行き、ブルガスまで450キロの切符を18.8Lv(1,032円)で買う。PCを利用して印字された切符は二枚続きで、キリル文字を推測すると、18.3が乗車料金、0.5が座席指定料金らしい。

しかしPCを利用しているのに、列車及び座席番号は手書きだった。窓口は他にもあるので、座席占有に関する情報は共有される必要があるのに、コンピュータ・ネットワークではないらしい。実際にどのようにしているのか不可解だ。

切符を受け取り、ブルガス行き列車の利用するプラットフォーム番号を訊いたが、英語が通じず(そのせいか)けんもほろろだ。諦めて昨日のインフォメーションへ行く。担当者は替わっていたものの、この人も親切で、丁寧に4番線だから、地下通路を辿って行けとのことだった。

教えられた通りフォームへ行くと、既に列車は入線していた。切符に手書きされた12号車の95番を探す。4人掛け座席が向かい合う8名定員のコンパートメントで、95番は窓際だが既に若い女性が坐っていた。

入り口のそばに坐っていた少年に切符を見せ、窓際席か確かめると、間違いないらしい。このやりとりに気付いた彼女が席を替わろうとしたので押しとどめた。窓際は撮影には有利だけれど、車内を動き回るには通路側の方が気楽だ。

発車まで時間がたっぷりあるので、フォームを歩いて先頭の機関車まで見物する。車内が禁煙なのは歓迎だけれど、喫煙者の多い(裏が取れていないが、男性喫煙率が5割を超え、女性喫煙率も4割近いと云う情報もある)ので、この喫煙者達がそこ此処で煙草をふかしている。フォームの幅が広いから、なるべく避けて通ったものの、煙くて往生した。

定刻になっても一向に発車せず、15分遅れでようやく動き出した。10分ほど走行すると郊外に出る。老朽機関車と車輌だのに、ゲージが日本より広く平坦で直線に近い線路のせいか時速100キロを越すことも多い。

なだらかな地形に広大な畑が広がる。12時21分。

車窓からは見渡す限りの大平原。2時54分。

2時間半ほどしてかなり大きな市街地に入る。ブルガリア第二の都市で、人口35万のプロヴディフだ。列車の遅れは半時間になっていた。

大きい街のせいか、乗降客は多かったが、結局コンパートメントの満員状態は同じだ。

その後の停車駅でも乗降はあったが、ほぼ満員状態は変わらない。老朽車輌にもかかわらず、列車の人気は高いようだ。

泊まった南向きツインルーム。

終着駅ブルガスに着いたときは、遅れが55分に拡大し、6時45分だった。前日にホテル・アリスから電話予約して貰った、英ガイドお奨めのホテル・フォースに向かう。

とっぷり暮れていたので道に迷うことを危惧したものの、駅から至近（260メートル）だったし、判りやすいところだったので、英ガイド地図参照で無事辿り着くことができた。

フロントで予約を確認し、部屋を下見する。アリスより一回り広いツインルームで、居心地は良さそうだ。フロントへ戻りパスポートを渡してチェックイン。荷物を部屋へ収め、すぐ食事へ出かける。

出掛けに市街平面図を貰えないか訊いてみるが無かった。ソフィアでも市街平面図入手は失敗している。ともかく英ガイドの地図を頼りに、同ガイドの特にお奨めレストラン、プリ・リピテへ向かった。

晩飯

ブルガスは人口22万だが、街の規模は比較的小さく、街路は格子状で判りやすい。しかしプリ・リピテを見付けることはできなかった。それらしいところはあったものの、看板はなく灯りも消えている。

英ガイドには、「”ライムツリーの下”（店の名：プリ・リピテ）は、1910年に当時の市長のために建てられた邸宅に付随する中庭の木陰にある。」と説明している。この佇まいこそが魅力的なのだけれど、晩秋向きではなく休業しているのだろう。

ガイドブック頼みは止めにし、宿のそばで見かけた店を再チェックする。歩行者専用道路に面し、屋外にもテーブルが並び、篝火風にガスを燃やし雰囲気を出している。

店内は4人掛けテーブルが8セットあり、半分ぐらいに先客がいた。ウェイターに、「お好きな席に. . . .」と云われ、奥へ向かって数歩進んで足が止まった。葉巻を、それも食後ではなく食事中に吸っている輩がいて、その煙と強烈な香りが漂っている。

論外のマナーと思いウェイターに訊いてみたが、全く理解されない。ブルガリアでは喫煙可の場所であれば葉巻を何時どこで吸おうと問題ではないらしい。

店を出ようかとも思ったが、次が簡単に見付かるかは不明だし、そこに葉巻吸いがいないという保証もない。諦めてなるべく離れた、入り口近くの席を選ぶ。

すぐにもたらされた英文お品書きから、店の特製と称するサラダと串焼き肉は簡単に決めた。ハウスワインのデカンター売りはないとのことで、量に関して迷ったもののハーフボトルにし、銘柄は判らないからリストから値段が中ぐらいの赤を選ぶ。

上：店特製サラダ。下：串焼き

大して待たされることもなく、サラダとワインが登場。型に詰めて整形したようなサラダは趣向として好みではないが、味わいは良かった。胡瓜、トマト、パプリカ、白チーズ（フェタ系）、オリーブなどとドレッシングが上手く調和している。

分量的に日本の倍以上あるサラダを食べ終えた頃に、焼き上がったばかりの串刺し肉が運ばれてきた。ブルガリアは長いことオスマントルコ支配下だったので、当然ながら色々影響を受けている。この料理などもそうでシシュ・ケバブ系と云えそうだ。肉は牛だったが美味い。

グラスが空になるとウェイターが気付けば継ぎ足してくれる。これはごく一般的だが、そのとき壜を掴まずに、澱を溜めるためのへこみに人差し指、外側に拇で挟むようにして持ち上げる。店の流儀か、彼の自慢か判らないがケレンじみた所作は不愉快だ。

そんなことで、ハーフボトルでは結局飲み足りないと思いながらも、追加しないで食事を終えた。勘定はワイン14.88Lv(817円)、サラダ4.98Lv(273円)、肉12.98Lv(713円)。クレジットカードは扱っていなかったので合計32.84Lvを35Lvで支払い、釣りをテーブルに残す。

宿までは僅か100メートルだが、その途中でウォッカ700ccを16.5Lv(906円)で購入。部屋で先ほどキオスク風のスタンドで買ったミネラルウォーター1.5ﾘｯﾄﾙ0.9Lv(49円)で割って飲み直し。

ブルガス衛星写真　0 ― 200m

夜も更けてくると室温が下がり、暖房を入れる。スチーム暖房に電動送風機を組み合わせたものだが、風切り音が大きい。ファンを止めると暖房能力が大幅に低下する。うるさいのを我慢しても19℃以上にはならなかった。寒さには強いので不都合はないものの、室温調節が思うようにできないことに多少のいらだちを感じた。

ハッピー・バー・グリルの BENTO BOX - Yakitori BEN。店のウェッブページから画像をコピー。

ブルガス逍遥

11月2日も高曇りだが、薄日が射し、風もない穏やかな日だった。ホテルの簡素な朝食を、早々と8時から摂ったが、外出したのは9時半だった。

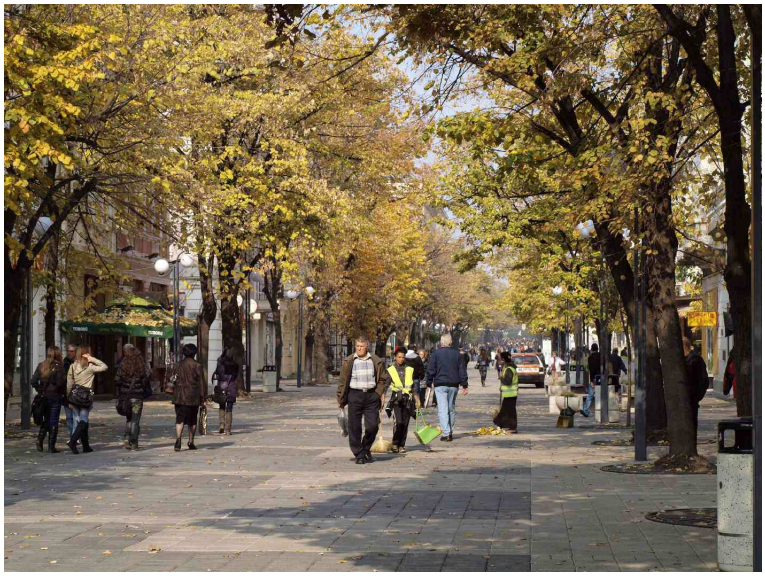
ブルガスは交通の要衝であり、「黒海リゾートへのゲートウェー」（日経BP刊：旅名人ブックス ブルガリア：以下「日ガイド」と略記）ではあるのだけれど、街自体に見所はほとんどない。しかし生来見所を追い掛ける志向は強くなかったし、その傾向は近年ますます強まっている。ぶらぶら歩いて街の雰囲気を感じられればそれで良い。

街の中心部を東西に貫く歩行者専用道路アレコ・ボゴリディーを行く。昨晩食事したレストラン・ロゼが面している通りだ。間もなく石畳の広場に出てその向こうに大きなレストランがあった。巨大な看板には赤い地に白文字で Happy Bar Grill 表示され、同じように大きく白地に赤文字で Happy SUSHI とも書かれている。

旅先ではその土地らしいものを食す主義だから、鮨をブルガスで食べたいとは思わない。しかし興味を惹かれたのでそばまで行くと、既に営業中で、ガラスドアに書かれた営業時間は午前9時から午後12時までだった。

開店時刻が早いことに驚いた。しかしその後旅を続けて判ったことは、二重の意味で、「それほど早くはない。」と云うことだ。まずブルガリアの飲食店は開店時刻の早い店が多く、8時から開いているところもある。一方ハッピー・バー・グリルはブルガリア全土に支店網があり（マクドナルドより店舗数は多いらしい）どこも営業時間が長く、例えばソフィアのそれは終日開いている。

閑話休題。アレコ・ボゴリディー通りに戻り、再び西へ行く。ブルゴスの脊椎とも云えそうなアレクサンドロフスカ通りと交差した。南北に延び、歩行者専用道路だけれど道幅の広い並木道だ。両側には洒落た商店が目立ち、飲食店なども多い。



アレクサンドロフスカ通り。

観光案内所。

観光案内所のそばにいたネコ。野良らしいが近隣に可愛がられているらしく、毛並みや性格のよい子だった。

しかしこの通りを見物するのは先延ばしにしてもう少し西にある観光案内所を訪ねた。平屋だけれど石造りの堂々とした建物で、スペースも広々したところに複数のスタッフがいた。

この時はブルガリアの観光案内所はこんなものかと、気にも留めなかった。しかしそれから10ヶ所の街や村を巡ってみると、此処が一番立派だったと云えそうだ。ろくに観光資源がないにもかかわらず、案内所ばかりが立派なのはなぜだろう。

ともかく市街平面図を入手した。さっそくこれを拡げ、明日の目的地ネセヴァルへ行くバスに、どこで乗ればよいかマークして貰う。鉄道駅の隣で、宿から至近なのは有り難い。

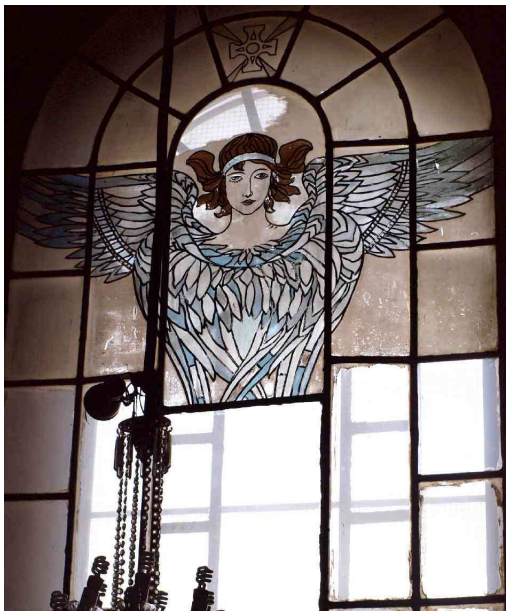
礼を云って案内所を出ると、そばにあった歩行者道路に設けられたベンチに坐り、インターネットカフェと、この日に訪ねてみようかと思うレストランの位置を英ガイド地図から市街平面図に書き写した。

もう少しましな目標があれば良かったが、ガイドブックが紹介する見所は博物館が三つとその他数項目で、例えばソビエト軍記念碑などという代物は、見に行きたいととても思えない。

地図を拡げている姿に反応したのか、通行人に話しかけられた。五十歳くらいのオヤジで、自らフランス人だと名乗り、あれこれ話しかけてくる。ブルガスには数ヶ月滞在しているらしいが、住まいはフランスだと云う。ともかく良く喋るオヤジだ。

日本はまだ訪ねたことがないらしいが、知り合いの日本人某氏は空手の達人で、山口組(？)のヤクザ十数名と大立ち回りを演じ、一人で全て叩き伏せたなどの話をする。悪人ではないようだけれど、だからといって親交を結びたいとは思えない人だ。

10分ほど生返事を繰り返しただろうか。ようやく話を切り上げて立ち去ってくれた。彼の話でただ一つ役に立つと思ったのは、「ブルガリアで治安に注意しなくても大丈夫だがスリ(ピックポケット)には充分警戒すべきだ。」だった。


聖キリル・メトディー教会のステンドグラスもどき。

案内所から目星を付けているレストランへ向かうと、途中に聖キリル・メトディー教会がある。ブルゴス最大で(多分)一番由緒ある教会だ。先を急ぐ必要もないので、覗いてみた。中は無人でひっそりと静まりかえっている。

ブルガリアでは珍しく、撮影を禁止していない教会だ。アールヌーボー風のステンドグラスが好ましく感じられた。しかし良く見るとステンドグラスもどきで、透明ガラスを絵の具でそれらしく彩色したものだった。

父なる神と子の天井画。

アールヌーボー風は、教会が完成したのが1905年とのことで納得。天井画はこれもかなり近代的雰囲気だけれど、それ以上に興味を惹かれたのは、（多分）父なる神が子なるキリストと共に描かれていることだ。

キリスト教美術には暗いのだけれど、父なる神を直接描いたものは少ないと思う。これはあまりに神聖なものを具体的形で表現することを恐れ多いと感じるせいもあろうし、キリストが人としてその形をこの世に見せたのに対し、父なる神はその姿を見た者がいないので（？）具体的なその形が不明と云うこともあろう。そんなことをぼんやり考えながら見上げる。

教会を出ると進路を替え、アレコ・ボゴリディー通りにでた。この通り沿いにインターネットカフェと目指すレストランがあるはずだ。ところがカフェは該当する位置を慎重に探し、さらに念のため近くで茶飲み話をしていた付近の住民に訊いても見付からない。レストランの方は見付かったもののシーズンオフ休業中らしく、どちらの探索も徒労に終わった。

気を取り直し、ネセヴァル行きバスの事前調査をする。観光案内所で付けて貰った印は鉄道駅の隣なので、まず駅を目指した。昨日は暗かったし、何よりも気が急いでいたので外観を一瞥もせずに離れてしまったが、昼光に照らされた駅舎を改めて見れば思いの外立派な建物だ。日ガイドによれば、1902年にソフィアからの鉄道がブルガスに乗り入れたとき建設された、由緒あるものだった。それにしても聳え立つ塔まであるとは！

駅前広場があり、それに隣接しバス停とタクシー乗り場があるのは、日本の駅前によく似ていた。そして20台以上のタクシーが客待ちをしている。

ソフィアでもそれとなく感じていたことだけれど、ブルガリアにおける人口当たりのタクシー台数は日本を大幅に上回るようで、そしてあちらこちらのタクシー乗り場付近には、「これで商売になるのか？」と思うような多数のタクシーがいる。

バス停の方へ行くと、車を降りて煙草をふかしながら雑談していた5、6人のタクシー運転手が、ブルガリア語かカタコト英語で客引きをする。英ガイドによれば、駅前で客待ちするタクシーは要注意とのことだし、それでなくてもタバコの煙を吹きかけられるのは願い下げなので、「バスで行くのだ。」と、足早に通り過ぎた。

バス時刻表は幸い英文併記だったし、予想以上の便数だ。

ブルガス駅舎。1902年に築造された。

ネセヴァル行きバス時刻表。1時間に3便ぐらいある。

メモ替わりに時刻表を撮影しておく。それから英ガイドのインターネットカフェがガセネタだったので、観光案内所で改めて別のネットカフェを教えて貰おうと、アレクサンドロフスカ通り（16P.参照）を北へ向かう。広い歩行者専用道路は、先ほどにもまして人波が増えていた。

ソフィアの街では車輌と歩行者の関係が日本の都市と大差ないけれど、ブルガスはなぜか歩行者専用道路が多く、だからといって車道が渋滞するようなこともなく、そして歩行者の数が多い。一見する限りでは羨ましい環境だったが、なぜそれが実現できるのか、弊害はないのか等はまるで判らなかった。

インターネットカフェの看板。компютърен клуб はコンピュータ・クラブと読むらしい。

アレクサンドロフスカ通りの北部にトロイカ（円形）広場があり、中心に無粋なソビエト軍記念碑がある。しかし露土戦争で20万人の戦死者（ブルガリア人は8万）をだしながら、オスマン帝国から祖国を開放してくれたロシアに恩義を感じるブルガリア人は、東欧の中で例外的にソ連にも親近感を抱くらしい。ちなみにソ連軍はブルガリアでナチと戦った。

広場から西へ分岐する道を僅かに入ると、インターネットカフェがあった。築50年くらいの木造一戸建てだ。中には10台くらいのPCが置かれ、半分ぐらいに利用者がいた。

指定されたPCで、まず漢字が表示されるか確かめてから椅子に坐る。数通のメールを読み、その一通に返信を書いた。Web経由の漢字変換が利用できたのだが、これが例外的であるとはこの時点で知る由もなかった。

1時間弱でインターネットを切り上げる。料金は安かったが、レシートを紛失したため判らなくなってしまった。ちなみにブルガリア人はレシートが好きなようで、商店はもちろん、ネットカフェ、タクシー、レストラン、民宿などあらゆるところで印字されたレシートを手渡される。

閑話休題。午前中のレストラン探しが空振りだったので、昼飯は宿のレストランを利用することにした。日本国内、海外共に、宿のレストランは何か郷土料理色が薄く、無国籍料理を食べさせられるような印象が強いため、日頃はめったに利用しない。しかし、ロビーから奥に続く此処のレストランは、イタリア料理を売り物にしているようで、試してみる気になった。

ショプスカサラダ。

ちなみにブルガリアの食べ物に一番強い影響を与えているのはオスマン・トルコだと思うが、イタリアの影響もかなりあるようだ。

手渡された英文併記お品書きから、ショプスカサラダとピザ・カプリチョーザを選び、酒は赤ワインのフルボトルにした。ショプスカサラダは国民サラダと云っても良いような品（英ガイド）らしく、どこの食堂お品書きにもほぼ確実に載っている。

ピザ・カプリチョーザの小。

元々はソフィア西部ショプルック地区で食されていたものとか。きゅうり、トマト、タマネギ、ピーマンなどドレッシングで和え、上からチーズ下ろしで粗い粉状にしたフェタ系の白チーズを野菜が見えなくなるぐらいたっぷり振りかけてある。

日本のサラダと異なり、量的にたっぷりしているのはヨーロッパに共通して云えることかもしれない。ともかくチーズたっぷりのサラダは味わいとして好みだったし、ワインとの相性も良い。ゆっくり食べ進むうちにピザも運ばれてきた。

カプリチョーザ（イタリア語で気まぐれ）だから、具材に何が使われているかが楽しみだった。しかし思いのほか平凡に、ハム、サラミ、マッシュルームなどで、輪切りにした茹で卵が多少風変わりだろうか。

味加減は良かった。しかし食べ進めるうちに何か物足りなく感じる。オリーブ油の量が足りないのか、チーズの種類なのか、淡泊すぎるようだ。

食事を終え、勘定は部屋へ付けずその場で済ませた。サラダ4.5Lv(247円)、ピザ5Lv(275円)、ワイン20Lv(1,098円)。カードで支払う。執筆時になって気付いたことだけれど、支払えばレシートが渡されるので、旅の資料収集には良かった。レシートに印字された読めないキリル文字 шопска салатаをインターネットで調べ、ショプスカサラダと納得するのも面白い。

食後は真っ直ぐ部屋へ戻り午睡。目が覚めてからも読書などで時を費やし、外出することはなかった。この日の日没は5時で、半を回ると街は夜の帳に覆われた。

明日の宿を予約して貰おうとフロントへ行った。ここ数年多用し、ソフィアでもやったのは、予めマークした英ガイドお奨め宿にフロントから電話して貰う方式だ。

フロントにいる女性はなぜかチェックインの時以来交替もせず一人でやっている。家族経営の宿で、さしずめ女将なのかもしれない。ともかく顔見知りなので気軽に頼むことができた。英ガイドを見てすぐに電話してくれたまでは順調だったのに、いざ話し始めるとどこの宿も休業中だ。

結局マークしてなかったものも含め、英ガイドの宿は全滅だった。しかし彼女は一向に動ずる気配もなく、すぐさまインターネットでホテル検索し電話をかける。その二軒目で泊まれそうな感触を得た。受話器を下げると、一泊60Lv(3,295円)だが良いかと訊く。料金は問題ではないが、旧市街との位置関係に不安を感じる。

一瞬逡巡したものの、ともかく行ってみなければ始まらないし、一泊してから宿を替えることも可能だ。そのまま予約を確定して貰った。彼女は要点をメモ書きして渡してくれる。

部屋へ戻りカード会社へ問い合わせる（コラム参照）ため、KDDIのブルガリア窓口に電話する。簡単にコレクトコールで繋がり、利用金額は判ったものの、通常日本での業務時間内しか担当

海外キャッシング方法比較

旅期間中のクレジットカード清算以外に必要な資金を、全部現金で持ち歩くのは剣呑だ。そこで渡航後に現地での現金調達方法としては

1. 銀行キャッシュカード（BCCと略記）
2. クレジットカードのキャッシング（CCと略記）

が考えられる。なおトラベラースチェックは大変不便な上、レートも悪いので論外とする。

BCCの場合は両替手数料として4％弱が徴収される。これに対して、CCは利用した日から精算日までの利息を支払わなければならない。この日数は通常25日～55日なので年利率15％であれば1％～2.3％なのでCCの方が有利だ。

利息をさらに抑えたければ、利用金額＋（振り込みするまでの）金利がいくらになるかカード会社に問い合わせ、インターネットバンキングなどで振り込めば数日間の金利（5日で0.2％）で済んでしまう。

しかし国際電話の料金が利息より高く付いてはなんにもならない。これに関し渡航前に入手できた情報は、「カード紛失届で窓口にコレクトコールで電話し。キャッシング部門に転送して貰えばよい。」だった。ブルガリアのオペレーターにコレクトコールを頼むのはブルガリア語ができないと（多分）駄目だが、KDDIがブルガリアでもフリーダイアルで受け付け（実際は日本にいる）オペレータが対応してくれる。

部署は対応できないので、利息や振込先に関する回答はできないと云われる。その他訊きたいこともあり、結局10分ほど話し込んでしまった。

電話が終わると6時になっていた。読書にも倦んだのでシャワーを浴びてから晩酌にする。ところがシャワー設備の水栓等は申し分ないものが使われているのに、シャワーカーテンなどはない。気をつけて使っても所詮無駄な抵抗で、便器の廻りまで水浸しになる。ブルガリアの人は不愉快に感じたり不便と思わないのだろうか。

晩酌にいささかツマミが不足に感じられた。昼間食指の動いたドネルケバブは、スタンド式の売店が宿のすぐそばにも一つある。これをツマミに加えるべく出かけた。

ドネルケバブ2個。

ブルガリアのドネルケバブは、イスタンブルのものに比べると、フライドポテトなどが付け合わされているのが違いだが、そんなことは気にせず購入。2個で1.5Lv(82円)だ。

ついでに昨日酒を買った店でミルクを探す。見付からないので英語を喋る店員がいたから訊いてみる。ミルクはなく、似たような(？)飲み物ならば液体ヨーグルトがあると云のでそれを買った。400cc脂肪分1.5%のものが1.7Lv(93円)。レシートにはケフィア・カチューシャと書かれていた。

宿の周りは昼間でも車輌の往来が少ないのに夜はさらに減り、その静けさ故に、この晩も空調の騒音ばかりが際だった。皮肉なものだ。

４．ネセバル(Несебър)

路線バス

11月3日も晴れだった。8時半に朝食堂で簡単な朝食を取る。閑散とした食堂だったが、二人いた女性スタッフの一人がタバコを吸い始める。一応室内禁煙のルールはあるらしいので、彼女は表に通じるガラスドアを開けると、そこで煙草をふかしている。

外気温は5℃くらいだったので、外からは冷気とそしてタバコの煙が室内へ流れ込む。不愉快なので抗議しようかとも思ったが、昨晩の葉巻などもあり、この国では許されるのかと様子見した。その後旅を続け、度々商店のドアを開け、ドア框の上でタバコを吸っている人を見かけた。これが一般的らしい。